

書き下ろし——10

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

蜃気楼の帯

戸川昌子



書き下ろし・新本格推理小説全集10

蜃気楼の帯

定価三八〇円

昭和四十二年七月五日 第一刷

著者 戸川昌子

発行者 鈴木敏夫

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口七三の二五

蜃気楼の帯



戸川昌子



読売新聞社

新本格推理小説に寄せて

松本清張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難渋、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたところに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

も推理小説的手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していったことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は総合^{そうごう}結果したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るといような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならないからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「宝石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説的手法を用いるのが流行した。

しかし、正直に言って、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚^よりかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ポウのジュバンもの以来、「謎」が伝統であった。

「知恵の闘い」（木々高太郎説）なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまでできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るといふことは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといつても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然^{きんぜん}としてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書き下ろしに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書き下ろしの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書き下ろし小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいさか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違った作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればひ次の陣列に加わってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

目次

新本格推理小説に寄せて 松本清張

序 章	11
第一章	13
第二章	39
第三章	72
第四章	98
第五章	146

第六章	174
第七章	204
第八章	232
第九章	256
第十章	265
終章	298
解説	300

松本清張

装丁 重原保男

蜃
気
楼
の
帯

へこの小説は、一部の地名を除いては、すべて創作によるものです。アフリカとアフリカの動物たちへの深い愛情をこめながら……

作者

序 章

《電がやみ、雨が小降りになると、ゴリラたちは餌をあさりにちらばっていった。そのとき灌木の背後から、聞いたこともない奇妙な断続音が聞こえてきた。大きなオエー、オ、オオオという早い断続音で、最初が強く激しく、他の音とははっきり分けられていた。》

この音は、何度もくりかえして発音され、わたしはそれがどんな状況から発せられているのか、数分後に気づいた。D・Jと一頭の雌が一緒にいた。彼らは交尾していたのだ。雌はひじと腹とひざをつき、D・Jが後からマウントして雌のヒップをつかんでいた。D・Jが押し、斜面が急だったため、二頭は下方に移動した。彼らは十五分間に十二メートルも進み、雌は手で茂みを分けた。彼らは三度止まった。D・Jは速いスラストを行っていた。

発声はしだいに荒々しくなり、雌は金切り声をあげた。雄は雌の脇の下をつかみ、ほとんど背中におおいかぶさっていた。一本の木の幹に身をもたせかけ、D・Jの開いた唇からはしわがれた震えをおびた、ほとんど咆哮に近い声が洩れ、それが大きく吸いこむ息で断たれた。D・Jは坐り

こみ、交尾は終了した。雌は十秒ほどじっと横になっていたが、やがてゆっくり斜面をのぼってゆき、雄は喘ぎながら後に残った。

これは秘め事というには程遠い営みであったのに、群れの他のメンバーは一頭も何の注意も払わなかった。交尾がすっかり見える場所に休んでいたボスの大親父でさえ、見たところこの光景に無頓着な様子だった。

G・B・シャラー「ゴリラの季節」(小原秀雄訳)より

第一章

1

一九六八年一月二十六日のダカールは、温度が摂氏三十八度、湿度九十六パーセントというアフリカの真夏らしい暑さだった。

ヨーロッパから、このアフリカの西南の突端に辿りついたジェット機の乗客は、誰もが滑走路に着いたとたんに、飛行機の丸窓が地上の暑さのために白く曇るのを見て吃驚する。

空港が闇にとざされた九時過ぎに、パリ発のジェット機が二十分遅れて着いた。その便には、日本人の乗客が二人乗っていた。一人は三十五歳になる男性で、ニューヨークのバークレー大学の研究室に勤務する人類学専攻の学究だった。彼は中背で、縁無しふちなしの眼鏡をかけていたが、顎が張って、一つのことに執着しやすいタイプであることを示していた。

もう一人は、二十六歳になる女性だった。彼女は、日本では有能な女性アナウンサーとして知られていたが、半年前からフリーになっていた。アナウンサーの中では、一、二を争う美しさで、ブラウスの下の肉づきと、すんなり伸びた四肢^{しし}どが彼女の躰^{からだ}の魅力を示していた。

二人は同じ飛行機に乗っていたが、お互いを日本人同士だとは認め合わなかった。女のほうは、英字新聞を読んでいる相手を中国人だと思っていたし、男のほうはもともと人とはあまり喋^{しゃべ}りたがらない内向的な性格であった。

ただ、男のほうは、東洋人の女の知的な、ちょっと冷たい感じのする顔の美しさと、短かいスカートの下から伸びたコーヒー・ブラウンの靴^{くつ}下に包まれた脚に、瞬間ではあるが、心を奪われた。だから彼は、女の印象を無意識のうちに心に留めていた。

ジェット機のタラップを一步降りた瞬間に、ひどい湿気を含んだ暑さに躰を浸されて、女のほうは急いでスーツの上着を脱ぎ、白いナイロンのブラウスだけになった。ブラウスの下のかたちのいい乳房は、彼女の武器であった。

数歩おくれて降りた男のほうは、長い税関の検査の終るあいだ、女のブラウスの胸に視線を置いていた。

税関の検査を終ると、女のほうは、タクシーに乗って市の中央にある「十字星」というホテルに投宿した。誰ひとりとして出迎えてはいなかった。

ホテルは一流に指定されているところだったが、ウインドー・クーラーは二十年前の物で扇風機の羽根がひっかかったようなひどい音をたてていた。彼女はぬるいシャワーを浴びたあと、バスタオルを躰に巻きつけただけでベッドの上に横になった。寢室の床には絨毯もなく、むきだしのリノリュームのままだった。それでも裸足で降りると生暖く、じっとりと湿気を帯びていて気持ちが悪かった。窓にもカーテンはなく、灼けつくような陽射しをさえぎるための黒い鉄のシャッターがおりていて、それが牢獄のイメージを与えた。

彼女は寝苦しさにしばらく輾転としたあとで、睡眠薬を三錠なまぬるい瓶詰めの水で飲んだのだった。

男のほうは、中年の外人夫婦が自家用車で迎えに来ていた。外人はD大学の教師で、同じように人類学の研究をしていた。男は同業の研究者に迎えられ、最新型のエア・コンのきいた邸宅に迎えられた。

学者らしく、すぐに、アフリカに現在棲息しているゴリラやチンパンジー等、霊長類人科の分布について話しはじめたのだ。男の念頭からは、先ほど空港で彼の意識のすべてをとらえていた白いブラウスのことは、すっかり消えてしまった。

彼は飛行機の食事のたびに出る鳥料理にうんざりしていたが、出されたチキンのサンドウィッチとシャンパンとは、相手の好意を傷つけないために口をつけた。しかし、三時間後に、彼は食中